



僕が融資した
事例を
紹介するよ!

震災を乗り越え、市民の新しい未来の礎を造る
南蒲生浄化センター&仙台市地下鉄 東西線

宮城県仙台市

被災前 全景



被災後 全景



Vol.1 南蒲生浄化センター
市民の暮らしを
支えるため、
震災での経験を胸に

唯一津波の被害を逃れた、昭和39年建設当時の古いゲート(撮影日H26.01.18)

職員と関係企業の努力で、 震災5日後に処理を開始。

私たちの暮らしを支える社会インフラとして忘れてはならない存在である下水道。仙台市の南蒲生浄化センターは、仙台市の北東部、海岸から約300mの位置にあり、市内で発生する汚水の約7割を処理していますが、東日本大震災では主要な構造物や設備が破壊・冠水・流出するなど甚大な被害を受けました。

「今思い返すと、あの時の判断が正しかったか迷うのですが、職員は使命を果たすために全力を尽くしました。」このように3年前を振り返るのは、同センターの石川敬治所長です。

震災によって下水処理の機能がストップしたにも関わらず、市内からの汚水は同センターに流れ続けました。このままではやがて逆流し、市内が汚水で溢れかえってしまいます。何としてもその事態だけは回避しなければ……。その思いを胸に職員は、余震や津波警報が鳴り響く中、放流ゲート開放に向かいました。ゲートのほとんどは津波により破壊されていましたが、唯一残されていたのは、今は使用していない昭和39年建設当時の古いゲート（ハンドル100回転で1cm開く）。これを全員で力を併せて1m60cmまで開放し、最悪の事態を回避しました。

一方、石川所長は発災時、議会对応中で本庁舎にいました。すぐに同センターに戻ろうとしましたが、途中で津波に流されるなど様々な障害のため、たどり着けませんでした。職員の安否を心配しながらも市役所に戻り、施設や設備の関連企業に連絡を取り続け、やっと連絡が取れたのは深夜。「ありがたいことに深夜にも関



わらず企業には多くの人が残っており、夜を徹して駆けつけてくれました。」(石川所長)

これらの取り組みによって、震災5日後には応急対応により簡易処理がスタート。その後、被害が比較的軽微だった施設を利用して、暫定生物処理を行っています。

平成24年9月には、本格復旧に向けた工事が始まりましたが、新しい施設はコンパクト化を図り高さのある立体構造とした結果、東日本大震災級の津波にも耐えられる設計となっています。

「大震災やその後の復旧を通じて私たちは沢山の経験をしました。その中で強く感じたのは、究極のBCP(事業継続計画)とは、的確かつ迅速に判断できる人材を育成するという事。今後は、新しい施設とともに運用体制の充実を図っていきます。」(石川所長)

平成27年度末に完成予定の新しい下水処理場では、以前と同レベルのBOD5mg/Lという処理水質を想定しています。これは計画値の15 mg/Lを大幅に下回る数値。同センターの面する海には、水産資源豊富な漁場が広がっています。仙台市民の快適な生活を支え、豊かな自然を守るために、南蒲生浄化センターはこれからもその使命を果たしていきます。



撮影日 H25.12.26 躯体コンクリート打設及び鉄筋組立て



本施設の復旧にかかる資金については、JFMが融通するものではありませんが、旧公営企業金融公庫において融資させていただいた本施設について、震災復興を応援する意図からご紹介させていただきます。